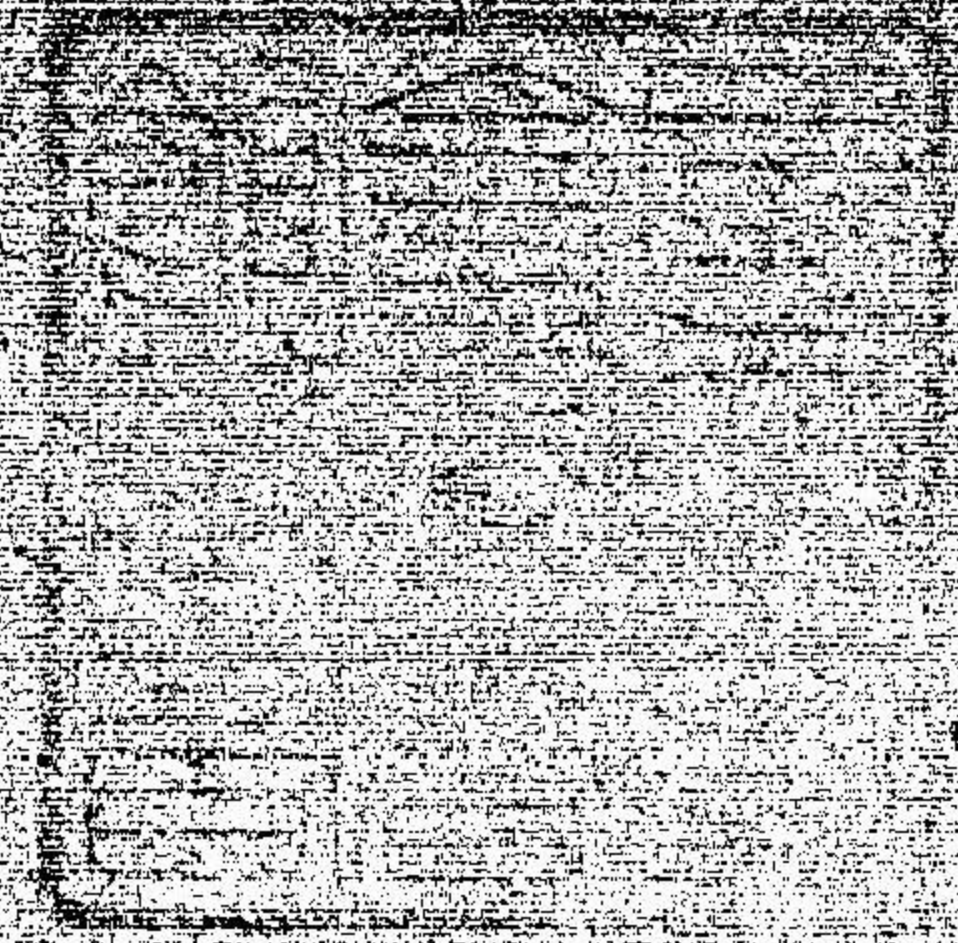


國

子

子



国立国会  
26.9.10  
図書館

245459

8/1.56 & 217k

まれくに  
は訓をも  
かれり

國かな遣ひ早學

小田

國語の數、大よそ五万ばかりも有りぬべし。その假名を

一心得むに、難しとも難きことなり。然るを、いと易く知ら

るゝ法有り。今其數万と多き國語の假名を、語に記おちる

ゝ良法を、記して世に弘めんとする書の前、まづ假名の

名義、万葉假名、眞假名、平かな、片かななどの諸體のこと、そ

の字原などの事をも、記しつ。

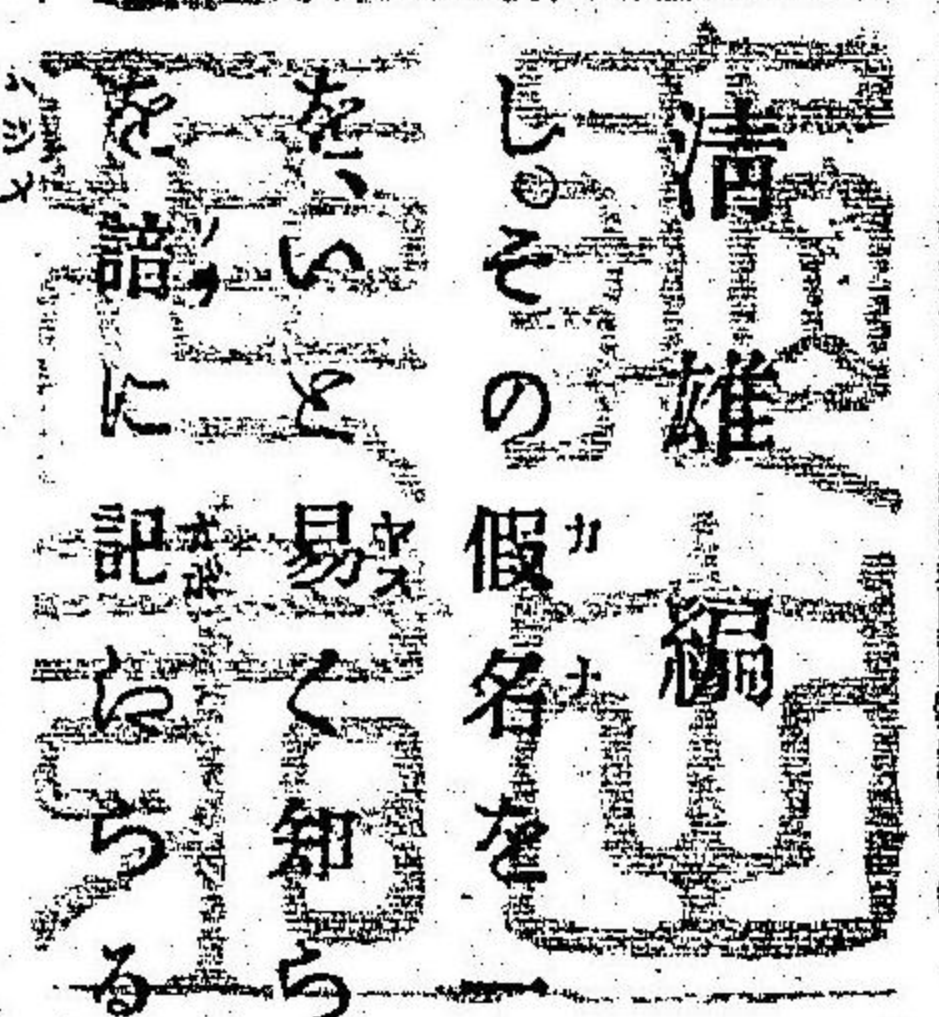
假名の、カリナといふことにて、漢字の音をかりて、國語をう

つすあり。その字義に、かゝらうらで、櫻を佐久良、雪を由伎と

書きたぐひなり。名の字といふことあり。字を古名といひ

き。周禮曰、外史掌達書名。四方註曰、古曰名。今日字。さて、古の假

き。周禮曰、外史掌達書名。四方註曰、古曰名。今日字。さて、古の假



名ハ、すべて右の佐久良由伎などの如く書けるを、万葉集の頃ハ、音訓をまじへ用ゐき。たとへば鬱蟬ウツシヅメ(現身ウツミの轉)布本フホ麓ノと書ける類、これを世に万葉假名といへり。鬱蟬ハ三の卷、布本ハ十八の卷に見ゆ。真假名に對へて、省き書けるを片カナといひ、草體に書けるを平かきといへり。

片假名。また大和假名ともいへり。倭片假字反切義解、序曰、到於天平勝寶年中、右丞相吉備眞備公取所通用于我邦假字四十五字、省偏旁點畫作片假字といへり。これ古來よりいひ傳ふるところあり、といへども、無稽の妄説にして、信すべからず。また常の伊呂波假名とも弘法大師の造り給ひしかと契沖阿闍梨といへれど、これも又信じがたし。おもふに其、始ハ詳ならねど、もと伊呂波假名にあらひて、四十餘字を一

様に、作り出たるものといおもわれず。そのよし古體の片假名の古書の訓點及び點圖に、残れるによるときハ、その始ハ字訓を傍記せんに、眞名をもて書かんハ點畫多く煩はしきがまよふ省きて書ける是ハ片假名の起原あるべし。今、流布の日本書紀よ

税務 調 仁德天皇紀 七年九月  
とあるハ、オホヅカラ、ミツギの借訓あり。  
また

吾兄 應仲天皇紀 六年二月  
と左リ假名を付けたるハ、ワガセの真假名あり。これらの類、猶多し。今その一二を擧

げて證とす、むかしハ字畫の少きを省かて其まよを用ゐつと見ゆ。今昔物語に乃、字天、字などハ眞名をまじへ書きたり、これによりておもふに古點に片假名の異體多かるハ亦

宜からずや。

四

片假名、何の時より今の字に定まりしよか、字體まぎらひしからず。古體ハチイ伊<sup>ア</sup>ホ保<sup>ヲ</sup>和<sup>ヲ</sup>ヨ與<sup>レ</sup>示<sup>レ</sup>禮<sup>示</sup>子禰<sup>レ</sup>ム无<sup>ヲ</sup>乃<sup>、</sup>キ幾<sup>チ</sup>テ天<sup>ア</sup>ミ身<sup>尸</sup>ミ民<sup>ヒ</sup>サ左<sup>レ</sup>ヒ比<sup>爪</sup>ス爪の類、昔人用ゐる所<sup>往々</sup>かくの如し。然るに示<sup>レ</sup>示<sup>同</sup>字を用ゐ又禾<sup>字</sup>の形も似たりア<sup>ア</sup>混<sup>レ</sup>レ<sup>レ</sup>に混<sup>ズ</sup>よつて云ふ。古昔書籍の訓點の如き諸家の點圖にまじふるに此の如き假名を用ゐて各、自<sup>讀</sup>法あり。故に讀<sup>易</sup>き書も輒くよみ難し。好<sup>古</sup>古書ハ片假名の異體あるもの少からず。今その一二をい<sup>ハ</sup>、日本靈異記ハ訓釋に用ゐる所<sup>皮</sup>ハ波字の省<sup>音</sup>ハ倍字の省、大須本、將門記の訓點ハ<sup>于</sup>汗<sup>之</sup>草體<sup>寸</sup>樹<sup>方</sup>ちどの類なり。又二合のものあり。モ<sup>玉</sup>の如きハ今已に

用ふれども、トキの假名に昔ハと書けるあり。これハ古體の、<sup>キ</sup>へ、トを合せたるあり。今寸<sup>トキ</sup>と書けるハ時字の省文なるべし。<sup>文</sup>温<sup>故</sup>教

伊呂波の字體ハ新<sup>々</sup>に製造したるものにて空海法師の作ありと云フ。事は、古書にハ其沙汰なき事なり。江談<sup>日</sup>、天仁二年八月<sup>口</sup>日、向<sup>フ</sup>小一條亭<sup>言</sup>談之次<sup>問</sup>日、假名手本者、何時<sup>始</sup>起<sup>乎</sup>、又<sup>何</sup>人所<sup>作</sup>哉。答<sup>テ</sup>云、弘法大師御作<sup>云々</sup>、件<sup>事</sup>無<sup>所</sup>見云云。源信僧都云々、説<sup>テ</sup>云云々、弘法大師云云寄<sup>四</sup>教、法文<sup>作</sup>イロハニホヘトノ讀<sup>給</sup>以來云々。釋日本紀云、伊呂波者、弘法大師作之由申<sup>傳</sup>歟。行阿假名文字遣<sup>序</sup>云、行阿思案するハ權者の製作として眞名の極草の字を伊呂波に縮<sup>な</sup>して云々。此<sup>レ</sup>と四十七字に、つゝりたる文句の事を弘法ちどの作ありといふ事を、中

五

頃云。出たるより、又字體をも、大師の<sup>と</sup>に作られたるあり  
と、云傳へたるものにて、實の據も無き浮説なり。今其弘法の  
製造の字に非ざる故を委く云ん下文の事はまづ今も古人  
の筆跡の適遺タテマツれるものを見るに、貫之、道風、佐理、行成、公任、重  
之などの平假字、皆今の伊呂波の字様とい同じからず。甚古  
色あるものにて、しかも草書の本意を忘ざる字體多し、もし  
今の伊呂波の字様、弘法の新造にて弘法より平假字を始めて  
書來れるものあらば、必貫之、道風などの書も其字様にこそ  
従ふべき事あるを、更に似つかはしき所なきは、今の伊呂波  
の字様の、後世に出たるものにて、古人の平假字の草書の轉  
々して、おのづからに、一體のやうになりたるものある事明  
らかかり。世に弘法の眞蹟の寫なりとて伊呂波の摸本、數種

あれども、それの皆後世、筆道を唱ふる人の手に偽造せるも  
のなり。其字様諸本ともに、佐理卿、行成卿などの比の字様に  
遠くして、全く今の俗間の書きからへる伊呂波の字様に  
異ならず。字體古色ある事、更に無て筆法も甚鄙俗なり。他  
の弘法の眞蹟に、似るべきものならず。是の具眼の人、誰  
も一目して、其偽を辨すべき事あり。年山紀聞云、今の伊呂波  
の字様を空海師よりと云事いかに侍らん。さまぐの草書の、  
其よりはるかの前に、三韓人、又唐人多渡り來りて、こゝたの  
人も、あまた入唐したりければ、おのづから習傳へ侍りまし。賴  
長左字府治の御息今麻呂の、かゝれたる伊呂波字様の、思ふに古  
風ある姿あるべし。左にうつす俊賴のかゝれたる様を見て、  
思ひやるべし。云々とありて俊賴の眞跡を摸し出せり、是の

甚卓見と云べし。契沖の舊來の俗説に従ひて、伊呂波の字體  
 ともに弘法の作あり。といへるを年山の其門人にして、却て  
 師説に従はずして、かく云ふの、さすむに博達弘才の人かれ  
 ばなるべし。伊呂波の文句を弘法の作ありと云ふ事、もたら中  
 世より云ふ事なれど、今其詞を玩味するに體裁語氣、弘法の時  
 世より、遙に後あるべし。但伊爲乎於衣惠さとの用る様、古  
 の假字の法に、たがひざるを思へば、假字の法、未だ亂ざりし  
 時の物なれば、花山一條の御時さとの前後に、出來れるもの  
 なるべし。決して夫より古きものには有べからず。初句を七  
 言に云、出せるさど、今様のうたひ物の句法にて、古き長歌に  
 の無き事なり。これにても、弘法の時世のものあらざる事、明け  
 し。又貫之の古今集の序に、難波津淺香山の歌の、歌の父母の

やうにて、手習ふ人の始にもしけると云、源氏物語に、幼少あ  
 る人の上を云て、難波津をだに、まだはかばかしうもつづけ  
 ず、など云るを見れば、古の幼稚の人の手習の始に、難波津  
 淺香山の歌を書いて教し事にて、伊呂波を書いて教し事、貫之  
 の頃の勿論にて、源氏物語書けん比までも無かりしと見ゆ。然  
 ればたとひ、花山一條の御時の前後に出來たる物なりとも、  
 其世に行れずして、世に専ら行れしは、暫後あるべし。彼宇  
 治、左府の息今麻呂に伊呂波を書せられしは、幼稚の人の、手  
 習の始の事と見ゆれば、宇治、左府の比さどより、少し前の程  
 に、世に専らに行成しにや辨字誤説此の辨頗確論にて更に動く  
 まじき説あり

伊呂波歌に、也行の江ありて、阿行の衣あし今日越ての活

こけ也勿論なる摩多體文の所謂やらいわのえお、かさたりな能生音  
 とて悉曇家にて、大切にいかに非ずや。其能生を棄て、所生  
 をとれるの、五音を、所生音と余の三十一六悉曇の祖と稱すべき  
 大師の作として、快からず。又我世誰ぞ常ならむの句の、誰  
 かとなくして、本末協らず。同じ文字あき歌なれば、さばかり  
 の難い、ゆるすべし。と助けてもいふべけれど、天曆以後あら  
 ばこそあらめ。上古に、さる拙き事あらむや。本居翁の詠なめ  
 すき四十七人おりの歌に、あめふれむらなせまをこゆる水まほけに、さ  
 かえぬふしあるを、見る伊呂波歌を長篇の古格に、とかいなはひて、古聊へも  
 の弘法大師といふべきに似たり(願限漫筆)

○真假名

阿伊宇延於 加伎久祁古 佐之酒世曾 多知都天登

那爾奴禰乃 波比不閉保 麻美牟米毛 夜以由曳余  
 和韋于惠袁 良利流禮呂

○平假名

わ	や	ま	は	あ	た	さ	か	あ
音和也之吳	音也之吳	音末也之吳	音波也之吳	音奈也之吳	音太也之吳	音左也之吳	音加也之吳	音安也之吳
ゐ	い	み	ひ	に	ち	し	き	い
音爲也之	音美也之	音比也之	音仁也之吳	音知也之	音之也之	音文也之省	音以也之	音以也之
う	も	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
音山也之省	音武也之吳	音不也之	音奴也之吳	音門也之	音寸也之吳	音久也之吳	音字也之	音字也之
ゑ	い	め	へ	ね	て	せ	け	え
音惠也之吳	訓江也之	訓女也之省	文反也之省	音禰也之吳	音天也之	音世也之吳	音計也之吳	音衣也之吳
を	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	ね
音遠也之吳	音與也之	音毛也之吳	音保也之	音乃也之吳	音止也之	音會也之	音己也之吳	音於也之俗



ら 音良之吳  
 門をッ 止をトの音といふ事、黒河春村氏の考に従ふ

○片假名

ア	交阿なり省	イ	伊省の	ウ	宇省の	エ	江省の	オ	於省の
カ	加省の	キ	畿省の破	ク	久省の	ケ	介省の	コ	己省の
サ	草省の	シ	文之なり全	ス	須省の	セ	世省の	ソ	曾省の
タ	多省の	チ	千之なり全	ツ	門全の	テ	天省の	ト	止省の
ナ	奈省の	ニ	全二の	ヌ	奴省の	子	子訓のなり全	ノ	乃省の
ハ	八全の	ヒ	比省の	フ	不省の	ヘ	反省の	ホ	保省の
マ	末省の	ミ	三訓のなり全	ム	牟省の	メ	女訓のなり省	モ	毛省の
ヤ	也省の	イ	伊省の	ユ	吁訓のなり省	エ	江訓のなり省	ヨ	與省の
ワ	和省の	キ	華省の	ウ		エ	慧省の	テ	子省の

ラ 省風の  
 リ 省利の  
 ル 省流の  
 レ 省禮の  
 ロ 省呂の

國語の假名を區別ちて 清音の假名 濁音の假名 音訛  
 の假名 予音 訛と和名抄によりて、ゆる音匣なり、の三種とす。その音  
 の相似て紛らはしく、互に誤るは、わは うる いるひ  
 えゑへ おはは とちじ ずづ等あり

おと 沫を おは 粟すう 坐を すふ 吸かひ 貝をかひ 權こゑ 聲  
 をこえ 肥を 伯母をお 祖母うづ 渦を うす 華冠のら  
 ち 氏を うじ 蛆と書く類、枚擧るにたへず。

此外には誤る假名あり。さて是を、いと易く知る法を、黒澤翁  
 満が天保四發明せしは、いと愛たき事あり。其は互に誤るべ  
 き假名の多少を較べて、少なき方をバ、記し置きて、多き方を  
 諸に知る、いとのる十を明らかに、千方をささる此上もなき

良法あり。

富樫廣蔭も松坂なる紀伊國家人にて、年若し、後には桑名に住  
八十が維新後、歸齒くほつともなく、假字遺捷徑を著せり。と聞  
けれど、まだ見ず。これらの法に據りて、近頃、物集高見、落合  
直文の二氏が記ける書あれど、漏れもし、省きもしつる語  
ありて完全せず。

されど、その解きさま、紛らひしくて、初學の人々に、聞きど  
り難げなれば、然るふしぶし、物集氏の釋きかたの明白な  
るに、ちらひて改めもし、三書に脱ちたる、語どもを補ひもし  
て次々に云ふべし

○清音の假名

○わの部

この假名の、わた綿わらふ笑などの如く、語の上にある時  
に、紛るゝ事なければども、あわ洙いわし、鱚あどの如く、下と  
中とに、ある時の紛らひし。あははていはは書くべし、されば、こゝ  
に、中と下とにありて、あど書くべき、かぎりを出だす。

(中にある語)○あわしほ白鹽(人常)○あわつ周意○あわも

き洙雪○いわけなし稚○いわし鱚○うわゆる植○おもよわ

し脛○かわく乾○くわぬ鳥芋○ことわざ諺○ことわり理

○こわね聲音○こわだか聲高○こわだえ高絶○こわづく

り歎こわ○さわぐ騒○さわやか爽○しわざ作業○

すわる居、坐、○たわむ撓○たわやか嬋妍○たわやめ婦人○

たわら菝○のわき暴風○はにわり半月○爲男十其五陰日爲女○

りわかれ歴齒○いらわた腸○ひしこいとし鯉魚○まわた

中にある語  
とは、わの  
字が中にあ  
る語といふ  
ことぞ、下  
にあるとい  
ふも同じ

し 壁帯 ○みのわた 三騰の類 ○よとし弱 ○わつけ 縷  
 (下にある語) ○あど 沫 ○うらわ 油廻(鳥廻里) ○おほわ 輻(車具)  
 かはわ 河曲(伊勢郡名) ○くつわ 轡 ○くるわ 廊 ○しじ 皺 ○はに  
 立輪 (作植人形) ○ひじ 鱗 ○まよわ (石炎螺) ○みじ 三輪 ○みじ  
立如二車輪一者也 ○ものあじ 硫黄 ○るのくつじ (草)牛膝  
器を也 僅に、是をだに、暗爲れハ、其餘ハ、一ツ々明アキラひるに及バズ。假令  
 知らぬ詞にても、皆ハの假名也、と廣く心得置きて、聊も、違  
 お事無きかり。

○うの部

この假名の、うめ梅、うを魚、かどの如く、語の上にある時の、  
 紛るゝ事なく、ううる 飢すう 居かどの如く、中と、下とにあ  
 る時の、ふとふとに、紛れて、うふるとも、すもとも、ふとふとして

ハ、書くべし。

○せう 鷹兄鷹(小鷹)を云

和名抄に、湖 ミヅウミ 驚 オソキウマ 菘 オホウバラ 溟海 ホホキウミ ちどの四五ッあれども、かゝ  
 る類ハ、いハゆる合語にて、水海 ミヅウミ 遲馬 オソキウマ 大荆 オホサバラ 大海 オホウミ ちどの義  
 どの、誰タシも知らるれば、誤る事をし。よりにて、今別に出さず。  
 此外に、猶うと書くべきハ、阿行、和行の四、三、三、レ (四三はゆる)  
 下二段に、えう、うらる、うれ、ゑう、うらる、うれ、と活く語と、音訛と  
 あり。其活語のハ、阿行と、和行との、四三とだに、知る時の、う  
 と書くべきハ、自ミ知らるべきことわりなれども、今の、ちな  
 みに、其語どもをも、次に出す。

○う得 うらる、うれ ○うう 飢 うらる、うられ ○うう 植 うらる、う  
 られ ○くう 蹴 くうる、くられ ○すう 坐 すうる、すられ ○ひう

頭押 ひうる、ひうれ

○ぬの部

此假名<sup>ひ</sup>の如く、<sup>ゐ</sup>猪の如く、一音の語ある時、或<sup>ひ</sup>、<sup>ぬ</sup>さらひ<sup>ひ</sup> 臀  
 ぬざる<sup>膝</sup>行<sup>な</sup>どの如く、語の上<sup>に</sup>ある時<sup>ひ</sup>、<sup>い</sup>に<sup>い</sup>紛れ<sup>い</sup>、<sup>い</sup>と  
 て<sup>は</sup>ら<sup>か</sup>く<sup>い</sup>べ<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>ぬ<sup>る</sup> 参<sup>あ</sup>ぢ<sup>さ</sup>る<sup>紫</sup>陽<sup>花</sup> <sup>な</sup>どの如く、<sup>い</sup>と  
 中<sup>と</sup>、下<sup>と</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>時</sup>、<sup>い</sup>と、<sup>い</sup>と、<sup>ま</sup>ぎ<sup>る</sup>ゝ事<sup>あ</sup>り。と<sup>ま</sup>い<sup>あ</sup>る  
 て<sup>ち</sup>は<sup>さ</sup>書<sup>く</sup>べ<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>され<sup>ば</sup>、こ<sup>ゝ</sup>に<sup>い</sup>、一音の語と、中<sup>と</sup>、下<sup>と</sup>  
 に<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>、<sup>ぬ</sup>と書<sup>く</sup>べ<sup>き</sup>、う<sup>ぎ</sup>り<sup>を</sup>、<sup>い</sup>だ<sup>す</sup>。次<sup>い</sup>に<sup>と</sup>出<sup>か</sup>せ<sup>く</sup>れ<sup>ば</sup>、其<sup>は</sup>  
 余<sup>の</sup>は、<sup>皆</sup>ひ<sup>と</sup>書<sup>く</sup>べ<sup>い</sup>ふ  
 余<sup>の</sup>は、<sup>皆</sup>ひ<sup>と</sup>書<sup>く</sup>べ<sup>い</sup>ふ  
 〇ぬ<sup>亥</sup>猪、〇ぬ<sup>の</sup>子<sup>豚</sup>の 〇ぬ<sup>の</sup>し<sup>ゝ</sup>の猪<sup>猪</sup>義<sup>の</sup>肉<sup>シ</sup> 〇ぬ<sup>似</sup>蟬<sup>蟬</sup>而<sup>其</sup>大<sup>貌</sup>  
 也<sup>者</sup> 〇ぬ<sup>蘭</sup>草 〇ぬ<sup>井</sup>地名<sup>の</sup>井<sup>井</sup>於<sup>於</sup>、其<sup>餘</sup>井<sup>筒</sup>の類<sup>、</sup>みな、井<sup>の</sup>一<sup>ツ</sup>を  
 も<sup>て</sup>、知<sup>ら</sup>る<sup>れ</sup>ば、出<sup>さ</sup>す。

(上)にある語 〇ぬ<sup>い</sup>の<sup>滑</sup>伊<sup>遠</sup>江 〇ぬ<sup>ぐ</sup>ひ<sup>堰</sup>楪 〇ぬ<sup>さ</sup>ら<sup>ひ</sup>臀 〇  
 ぬ<sup>ざ</sup>る<sup>膝</sup>行 〇ぬ<sup>ざ</sup>り<sup>農</sup>具<sup>底</sup> 〇ぬ<sup>せ</sup>き<sup>堰</sup>埭 〇ぬ<sup>で</sup>堰<sup>埭</sup> 〇ぬ<sup>な</sup>  
 べ<sup>の</sup>員<sup>伊</sup>勢 〇ぬ<sup>な</sup>か<sup>田</sup>舎 〇ぬ<sup>の</sup>く<sup>つ</sup>と<sup>出</sup>既<sup>に</sup> 〇ぬ<sup>の</sup>あ<sup>し</sup>複<sup>織</sup>  
 具<sup>織</sup>の 〇ぬ<sup>の</sup>と<sup>き</sup>緒<sup>魁</sup>草 〇ぬ<sup>も</sup>り<sup>蜻</sup> 〇ぬ<sup>や</sup>禮 〇ぬ<sup>や</sup>ま<sup>お</sup>  
 禮 〇ぬ<sup>る</sup>率 〇ぬ<sup>る</sup>厩 〇ぬ<sup>る</sup>不<sup>行</sup>也<sup>沙</sup>  
 (中)にある語 う<sup>な</sup>ぬ<sup>こ</sup>童<sup>女</sup>男 〇く<sup>さ</sup>る<sup>ち</sup>野<sup>猪</sup> 〇ぬ<sup>る</sup>断<sup>斷</sup>傷<sup>傷</sup>醉<sup>醉</sup>  
 也 〇ひ<sup>き</sup>ぬ<sup>る</sup>引<sup>率</sup> 〇ま<sup>ぬ</sup>る<sup>参</sup>  
 (下)にある語 〇あ<sup>ぬ</sup>藍 〇あ<sup>し</sup>る<sup>蓋</sup>草 〇あ<sup>ぢ</sup>さ<sup>る</sup>紫<sup>陽</sup>花 〇い  
 さ<sup>ら</sup>ぬ<sup>小</sup>井 〇い<sup>そ</sup>ぬ<sup>竿</sup>居<sup>信</sup>濃 〇い<sup>た</sup>る<sup>板</sup>井 〇い<sup>へ</sup>る<sup>家</sup>居  
 〇う<sup>ち</sup>ぬ<sup>鴨</sup>居 〇お<sup>ほ</sup>ぬ<sup>莞</sup>草 〇お<sup>ほ</sup>ぬ<sup>大</sup>炊 〇か<sup>た</sup>る<sup>乞</sup>兒 〇  
 か<sup>も</sup>ぬ<sup>鴨</sup>居 〇く<sup>も</sup>ぬ<sup>雲</sup>居 〇く<sup>ら</sup>ぬ<sup>位</sup> 〇か<sup>ら</sup>あ<sup>る</sup>紅 〇く<sup>れ</sup>  
 なる<sup>紅</sup> 〇さ<sup>む</sup>さ<sup>る</sup>騒 〇し<sup>ほ</sup>さ<sup>る</sup>潮<sup>騒</sup> 〇た<sup>な</sup>ぬ<sup>田</sup>の<sup>井</sup> 〇と

のゐ宿直○とりぬ 神門 ○あゐ 地震 ○なまゐ 澤寫(草) ○は  
しる 端居 ○かたる二郷名長門 ○まとい 圓居 ○まゐこゝる 眼皮  
○もどる 基 ○もどろるの物郷理備前 ○もちゐ 用

○いの部

此假名い、い、膽い、寝 などの如く、一音の語なる時、或い、いか  
鳥賊 いかづち 雷 あとの如く、語の上にある時、ゐに紛る、  
されば、ゐの部にいへる如く、ゐと書くべきものを、覺は  
きて、其餘シホのい、み、あ、い、ありと暗に知るべし。また中と、下と  
に、ある時、ゐと、ひとに紛る。されば、こゝに、中と下とに  
有りて、いと書くべき限りを出す。

(中)にある語 ○おいかけ綉冠 ○かいな黄草 ○かいはね  
下(肩) ○さいづち終樵 樵(方) ○さいだて 戲射 ○さいなむ 呵 ○つ

まゐりの蹄躡牛 ○のいづみ肉刺瘡

(下)にある語 ○あさい 朝寝 ○うまい 熟睡 ○かい 權 ○かゝ腹蛇

中 ○くまのい薬人参 ○まい黒牛 ○ゐい出既に

此外に、猶いと書くべき也行の二三三三ル中いは段ゆるに、  
○も、も、れと活く語あり。此レの、其語を、也行の二三の活キと  
だに、知る時、もと書くべきハ、自知らるべき、ことわりを  
れども、今の、ちかみに、其語どもを、出し置く、  
○かい 老おも ○くも 悔くも ○こい 轍、寒、こも ○むくい 報む  
くも

○もの部

この假名い、め、夢もき、雪などの如く語の上にある時、  
紛る、事なく、おも、老くも、悔などの如く、中と、下とにある



此外に、猶、ゑと書くべきの和行の四三、すきはち、ゑううる、うれと活く語あり。此の、其語を、和行の四三とだに、知る時、の、ゑと書くべきの自知らるべきことわりあれども、今のちあみに、其語をも、出す

- うゑ 飢
- うゑ 植
- すゑ 居座

○えの部

この假名の、一音の語ある時、或の語の上にある時、ゑに紛る。されば、いゝの部に、いへる如く、ゑと書くべきものを、記はあきて、其のほかの、皆、えありと、おぼべし。また、中ど、下どにある時、ゑとへどにまぎる。されば、こゝに、中ど、下どにありて、えと書くべきかぎりを、出す。は、次上、に、い、だ、き、せ、り、の、外、の、は、皆、へ、と、書、く、べ、い、と、

(中にある語) ○からえび 王餘魚 ○くえびこ 案山子 ○さくら

えをとこ月 ○あまえのき 荊(木) ○ひえどり 鶉 ○もえき 緑

(下にある語) ○あこえ 有(距離)岐(雄)也 ○あをひえ 竹(和)私(名)抄(引)刀

言、以、竹、刀、剪、也 ○いぬえ 香菜(草) ○かもえ 鴨柄 ○からえ (草) 麻 ○

金の、銀、薄、也 ○さゝえ 小筒 ○さゝえ 榮螺子 ○さすえ (盆) 捲

きの、え、別、に、出、さ、す ○さゝえ 類 ○しづえ 下枝 ○すみのね 住(吉)清(江)な、別、に、出、さ、す ○ながね

類 ○しづえ 下枝 ○すみのね 住(吉)清(江)な、別、に、出、さ、す ○ながね

の、具、車 ○ぬえ 鷄(鳥) ○のむとふえ 吮 ○のらえ 蘇(野)荏 ○はね 競

○ひえ 比叡(山) ○ひえ 薺 ○ひこえ 細(木)の ○ひこバえ 後(生)也

○かえ 笛 ○ほづえ 末枝 ○をえ 毒(瘴)也 ○をえ (中)

此外に、なほ、えと書くべきの、也、行の四三、すあ、い、ち、え、の、も、る、も、れ、と、活、く、語、あり、此、の、其、語、を、阿、行、也、行、の、四、三、の、話、と、知、る、時、の、自、知、ら、る、べ、き、こ、と、ど、り、な、れ、ど、も、今、の、ち、な、み、に

其の語どもをバ、次に出す。

○あえ。宵あも。○あえ。落(葉ニ)血(ナド)あも。○あまえ。撒、痴、あまも。  
 ○い。バえ。嘶い。バも。○うえ。瘡(ト)え。得(ト)あ。び。容(震)情(お)  
 びも。○おぼえ。記(おぼ)も。○おもほえ。所思(おもほ)も。○おび。容(震)情(お)  
 きも。○きこえ。聞(き)こも。○くえ。潰(く)も。○こえ。越(こ)も。○おきえ。消  
 肥(ふ)も。○さかえ。榮(さ)かも。○さえ。死(死)明(明)さも。○し。あえ。萎(し)  
 ちも。○そびえ。聳(そ)びも。○たえ。絶(た)も。○つひえ。費(つ)ひも。○  
 にえ。養(に)も。○え。生(え)も。○はえ。映(は)も。○はえ。蝕(は)も。○ひ  
 え。冷(ひ)も。○ほえ。吠(ほ)も。○みえ。見(み)も。○もえ。萌(も)も。○わか  
 え。似(若)どか。な。准(知)るべし。

○をの部

この假名ハ、を。男。を。雄。さ。どの如く、一音の語なる時、或ハ、を。

み。か。女。を。か。岡。な。ど。の。如。く。語。の。上。に。あ。る。時。ハ。お。に。紛。れ。  
 下。と。に。あ。る。時。は。お。と。ほ。と。に。紛。る。事。あ。り。○。か。つ。お。む。い。と。  
 かく。べ。し。但。國。語。に。て。中。と。下。と。に。お。と。書。く。べ。き。語。な。け  
 れ。バ、

但いともる合語にて紛らはしく聞ゆるも有れば、今ハそれらを、盡し出す。

○い。あ。お。ほ。せ。せ。り。稻。負。鳥。○。う。と。お。そ。ひ。禰。○。お。ほ。い。お。ほ。と  
 も。る。大。辨。○。お。ほ。お。バ。曾。祖。母。○。お。ほ。お。ほ。ち。曾。祖。父。○。お。ほ  
 お。ほ。ち。を。ち。族。父(會。祖)○。お。ほ。お。よ。び。古。母(大。指)の。義。な。り。指。を  
 ○。お。ほ。ま。つ。り。ご。と。の。お。ほ。ま。つ。ぎ。み。大。政。大。臣。○。お。ろ。か。お  
 ひ。稽。○。け。お。さ。る。劣。○。こ。お。よ。び。季。指。○。ち。お。も。乳。母(母)を。古。言



○とほつれや遠祖 ○なかのおよび中指 ○あましのおよ  
 び無名指 ○ひきおび袴帶 ○ひとさしのおよび食指 ○む  
 ぎおすき具軒杖(農)  
 中と下とにてい唯ほにのみ紛ふと思ふべくさてゐるこに  
 りをと書くべき限を出すおとほとい例の推して知るべ  
 し。

○を男 ○を雄(牡) ○を小(鹿) ○を唯(應聲) ○を(績) ○を(麻) ○を尾(尾張)  
出 ○を岑 ○を(呼) ○を(泉)  
上にある語) ○をうち(内) ○を(信) ○を(間) ○をかし可笑 ○を  
 かす犯 ○をかつ(木) ○を(楓) ○をかとし(苜蓿) ○を  
 ○をむ拜 ○をぎ(萩) ○を(尺蠖) ○をく招 ○をく  
 小櫛 ○をぐな童男 ○をぐるま小車 ○をけ桶 ○をげ麻笥

○をけら木(草) ○をこ(愚) ○をこ(た) ○をこ(つ) ○をこ(め) ○をこ(く) ○をこ(ま) ○をこ(同) ○をこ(ジ) ○をこ(ガ) ○をこ(ク) ○をこ(動)  
 をこじ(臙) ○をこたる(愈) ○をこづる(誘) ○をこめく(蠢) ○をこ  
 る(騎) ○をさ長里長邑長船長など准知るべし ○をさ(箴) ○を  
 さ譯語 ○をさぎ(兎) ○をざし(鰈) ○をさだ(他) ○を(河) ○を  
 さあし幼稚 ○をさなご幼兒 ○をさ(魚) ○をさ(竹) ○をさ(他) ○を  
(長)女 ○をさめつくるつかさ修理職 ○をさく(專) ○をさく  
(カ)折敷 ○をし(カ)教 ○をす食 ○をす小籠 ○をし(カ)章 ○を  
 ○をせる望見 ○をそ(獺) ○をそ虚 ○をたけび雄詰 ○をち遠  
 ○をちかた遠方 ○をちこち遠近 ○をち(草) ○をち(叔父) ○  
 をち老翁 ○をち智 ○をちかへる(ハ) ○をち(云) ○をち(夫) ○をち  
 ○をぢあし懦弱 ○をち復 ○をち(現) ○をち(男) ○をち

ナニニ  
小何といふ  
語こ、に出  
さぬも准へ  
知れ

こバしら左權柄(橋梁)○をとつひ前々日○をととし前々年○  
 をとめ少女○をとり媒鳥○をどる踊○をどくし(赤箭)○  
 をの斧○をの小野○をのこ男○をのこ男兒○をのよく  
 戦栗○をのへ岑上○をバ叔伯母○をはつせ小初瀬○をバか  
 薄穂○をのる終○をひ甥○をひと夫○をみか女○をみか  
 べし女郎花○をむかめ妾○をめぐ叫○をえ出既○をく唯(應)  
 聲○をくし勇壯○をくる撓○をり時節○をり檻○をる居  
 ○をる折○をろがむ拜○をろち大蛇  
 (中)にある語○おをがひ螺蚰○おをがへる蝦蟇○おをど磁  
 礎○おをのり用(陸) 用(青苔)○おをひとぐさ蒼生○おをひる出既○  
 おをみの海(三河)○おをむ青○おをむし螟蛉○いさをし勇  
 ○いをすき(草) 陸○いをめ魚(今日)○えをぢ伯父○おとねぢ

叔父○おほをぢ從祖父○かさをりの笠居(讚岐)○かつをむし  
 蟻蝶○かへりまをし養○かをる薫○くづをる罾○みをる  
 凝○さくらえをどこ出既○さるをがせ松蘿○しをり瓊○し  
 をる委(阿) 噴(な)○たをやか窃窈○たをやめ婦人○たをり凹  
 ○たをる手折○ついらをり九折○てをの鉞○とつぎをしへ  
 どり鶴鶴○とをむ撓○とをく撓○ひをむし婿○ひをり引  
 居○まどまをし司格○まをくも抹○まをす申○みだらを  
 のうま毛(馬) 雜○みをつくし潞標○やをら徐々○とぎを  
 き俳優  
 (下)にある語○おを阿(桑) 若(狭)○おを青○いさを功勳○いを  
 魚を○うをを後夫○おほを條(鷹)○かしたを獵師○さを竿○した  
 を堅魚○からさを連枷(農具)○さつを獵師○さを竿○した

を前夫 ○しろを白魚 ○たけを壯士 ○たまのを命 ○とびを  
 鰯魚 ○とを十 ○とりを針魚 ○ひを氷魚 ○ますらを丈夫 ○  
 みさを水竿 ○みさを操 ○みつを鐙鞞(馬具) ○みやびを風流  
 士 ○みを水豚

濁音の假名  
 じの部

ぢ<sup>っ</sup>じ<sup>っ</sup>ともに、濁音なれば、總て語の上<sup>ス</sup>に、有る事なく、唯語  
 の中と、下とあるが中に、ぢ<sup>っ</sup>の廣くして、じ<sup>っ</sup>のすくあし。よて、  
 其のすくあき方を記臆して、ひろきを暗に知るべきあり。  
 ○あきじひ 清盲 ○あじか 實 ○あじろ 網代 ○あまじ<sup>っ</sup> 瘰癧肉  
 ○いちじるし 灼然<sup>じ</sup> いちじろし ○かじく 憔悴 ○かじる 呪  
 詛 ○かたじけあし 辱 ○くじか 摩 ○くじく 黽 ○くじる 扶 ○

さくじり 黠 ○さじき 假肢 さずきモト云 ○し<sup>っ</sup>み 覬 ○し<sup>っ</sup>  
 む 縮 まいまる、し<sup>っ</sup>かむ、し<sup>っ</sup>らき 繻 ○たじろく 辟易、蹠 ○つ  
 きじらふ 舐 ○つじむ 瘰 ○とほじろし 分明 ○あじる 詰 ○な  
 ひじき 愁 ○にじよぶ 呻 ○にじる 蹂 ○ねじけ 佞 ○はじかみ  
 薑(草) かんはじかみ 吳茱萸(木) ○とじく 彈 ○はじむ 始はじま  
 る 始 ○ひじき 鹿尾菜(海苔) ひずきもトモ云 ○ひじり 聖 ○ひ  
 つじぐさ 白鮮(草) ○ほじ<sup>っ</sup> 脯(乾肉) ○まじなふ 禁厭まじもの  
 厭魅 まじこる 管 ○まじり 眦まじり 眦 ○まじる 交、雜まじ  
 いる 交まじか 交、雜 ○まじろく 暄 ○みじかし 短 ○みじろく  
 搖 ○むじか 貉 ○めとじき 荒蔚(草) ○やじり 鏃 ○あるじ 主人  
 ○あるじ 饗 ○いみじ 甚 ○うじ 蛆 ○うなじ 項 ○おなじ 同かや  
 じ 同 ○きじ 雉子 ○くじ 籤 ○さじ 匙 ○すさまじ 荒涼 ○つじ

辻つじきみ 辻君つじうら 辻占○つじ 躑躅いんつじ 羊  
 躑躅をかつじに菌芋(上) ○つむじ馬毛(牛) ○つむじかせ 髓○  
 とじ戸母(既=嫁) いへどじ 家刀自はじとじ 母刀自○にじ  
 ぬじ虹 ○はじ 櫃(木)はじゆみ 櫃弓 ○はじ 土師(氏) ○ひつじ 羊  
 未 ○ふじ 富士 ○むらじ 連(姓) ○をこじ 騰

僅に是を、そらむじて、餘ハ盡ぢの假名と、ひろく心得べし  
 づの部

是も、濁音あれハ、下にのみ、用ふ假名あるが中に、づハ廣く、  
 ずハせまじ。よて、ずの方を、そらむずべし。但見ず聞かずな  
 さいふ辭のずとい、別なり。おもひまがふべからず  
 ○あめのうずめ(天御女) ○いしずる 礎 ○いすいぢは 五十鈴  
 川 ○おすし固 おすまじトモ云○うすずまる群集 ○こすえ

はいまみ音  
 訛なり

梢 ○すいき 鱧 ○すいし 涼すいむ 納涼 ○すいめ 雀 ○すいろ  
 漫不 ○たゝすむ 彷彿 ○なすらふ 準 ○ねすみ 鼠 ○はいすみ  
 掃墨 ○ほゝすけ(綾冠) ○まゆすみ 黛 ○うす(冠華也) ○かす 數  
 ○かあらず 必 ○きず 疵きすつく 傷 ○くす 葛 ○すい 錫 ○す  
 い 鈴すいかやま山鈴鹿 すいむし虫鈴 ○はすすや 河ゆはすゆ 云は ○  
 えねす 唐棣花(木) ○みゝす 蚯蚓 ○もす 鴉

○音訛の假名  
 音訛とい、いはゆる音便なり。清雄ハ、和名抄燈火、具の、燈心  
 の下トコに、考聲切韻云、炷音主、又去聲、和 燈心、音訛也。とあるに  
 よりて、斯名カクナ附く。さて、音訛とい、本モトよりの語にハあらで、口

に唱ふる所の音のひきによりて、外の音に訛り云ふ類にて、正き語に、あらざるなり。されば往古に、有る事なし。中古より、常の物云ひ、みな、此の音訛に崩れたり。故に文に書く事なれども、歌に音訛を交ふる事あり。此の音訛といふ物の口にいひよき音に、くづれたる、物をれば、何の語にても、皆、ソいんの、三の音にのみ訛るなり。譬へば、髪搔をからがい吹革をふいがら参出をようで焼處をやいと暑きをあついで寒くをさむう藏人をくらうと又くらんと商人をおきうと又あきんとあど、其外、あけて、かぞへがたし。これらに音の訛りたるあり。又、音訛を、加ふるもあり。その給をたうべ漸をやうやう引をひいき真中をよんなかなといふ多し。總て音訛に、如斯ソいんの音に、くづれたる物

なれば、假名も、その如く、書くべき事なるを、やうもすれば、心得あやまりて、賜うけるを賜かける思ふ賜ふとおもふ賜ふといふやうに、まぎらす人多し。よくよく考へて、あやまるべからず。今、ソいんの音訛を、本居贈正四位の漢字三音考より、抄きて左に載するをよくよく見わたして、本語と音訛との味をも知るべし。

○い部の

(キをいど云)の朔の月意立をツイタチ。前比をサイツコロ。幸をサイハヒ。后をキサイ三枝をサイグサ。置賜をオイタミ。秋田をアイタ。當麻をタイマ。築土をツイヒチ。透垣をスイガイ。髪搔をカウガイ。衝重をツイガサ子。吹革をフイガウ。又カキケと活清雄き、焼涌な色のきをいふ。よき、あしき、などの類をヨ

イアシイおと云事、やゝ古くよりある事にて、今時の語ハ凡て皆然也。又中下あるひと、口語にて、皆イと云。是ハハのホハ、中下にあるを、皆ワ非ウエフと云へり。ハをワと云例に、又漢籍よらぬ是ハ非とすべけれとも、姑イの條に出せり。又漢籍讀に、大きに、をオホイニ、行て、をユイテ、置をオイテと云類多。中古の物語あり、又字音のしを、長く引て四時を、シイシ、詩歌をシイカ、飲食をインシイおと云、家司をケイシと云も此例也。

是ハ、ケを引たるものなれば、口語にはケエシと云を、……ケイの字音の格にならひて、假名にはケイシと書なり

○うの部

(ま)をウと云(ハ)、給をタウバリ、御座をオハサウズ、宣をノタウ  
 (み)をウとい(か)ハ、上野をカウツケ、小路をコウヂ、手水をテウ

ツ。髪搔をカウガイ、疊紙をタタウガミ。

(む)をウと云(ハ)、日向をヒウガ、多武峯をタウノミ子。手向をタ

ウゲ俗書候をサウラフ

(は)をウと云(ハ)、伯耆箒をハウキ、吹革をフイガウ。革堂をカウ

ダウ

(ひ)をウと云(ハ)、真人をマウト、首をオウト此外ニモ、某人ト云

韓櫃をカラウト、折櫃をナリウツ。又中下あるかの口語にハ、

皆ウと云。

(へ)をウと云(ハ)、卿前意也をマウチギミ、仕奉をツカウマツル

(は)をウと云(ハ)、直會をナウラヒ直衣をナウシ

以上はひかへほを、ウと云者を、ハの行の通音と心得て、多  
 かと書ハ誤也。通音にハ非ず。和名抄に、これかれ出たる、み

音と書り。音便なればなり。

く。をウと云ひ、藁鴉をワラウツ、下寫をシタウツ、又、よく、あし  
く、あどの類を、ヨウアシウなど云事多し。今時の言ひ、凡て然  
也。但東國人は、今も又篋子を、カウシ、冊子をサウシ、紙俗草紙、雙  
多ククと云なり。又、拍子をヒヤウシ、肩額をモカウ、族をゾウと云類も、音便か、  
法師をホウシと云も同じ。但此類は、入聲の韻を、なだらめて、  
る事もある。事あるに、音便の例には非る

（リ）をウと云ひ、取出をトウデ

（は）ひかへと活くひをウと云と、歌物語あどに賜ひけり、をタ

マウケリ、漢籍讀み、言而をイウテ思而をオモウテ、問而をト  
ウテ、從而をシタガウテと云類多し。俗言も同じ。

ふれらひ、音便なれば、皆ウと書べし。催馬樂古本に、醉而を、

惠宇天と、かけるを以て、證とすべし。然るを、はの行の通音  
と心得て、ふと書と非也。音便にふと云例あり。

音便のウの、本語の如く、聞ゆる者あり。凡て、古言よと、中、下よ、  
ウの音あるものを、をさく見ゆる。奈良の御代の末方より、  
これかれあり。されど、そのもと頭のカミベ、申とマナス、詣と  
マキデ漸と、ヤ、くは、後のことか、専とタクメ、冠と、カッブ  
リ、舅、夫、弟、妹、などのウトのヒトにて、右いづれも、ウの正言  
に非ず。音便なり。

（ウ）を添へて云ひ、設を、マウケ、賜をタウケ、清ら、をキヨウラ、八日  
を、ヤウカ、夜を、ヨウサリ、葬をハウムリ、佐官を、サウクワン、漢  
籍讀に、然而をシカウシテと云ひ、字音に、女官を、ニヨウ  
クワン、女房を、ニヨウバウ、夫婦を、フウフ、牡丹を、ボウタン

（ウ）ともんどもニやうに云音便）神某を、カウ某ども、カン某  
 ども云。神の本語はカミ 巫を、カウナギどもカンナギども云。  
 本語は、カム 姫を、オウナどもオンナども云。本語は、オ  
 ナギなり。ウナども、チンナども云。本語は、ラ 大神を、オホウワども、オホ  
 シンワども云。本語は、大三輪の義にて、オホミワなり、後世、此大  
 リ、出の意、心を得たり。オホミワなり、後世、此大  
 云、本語は、竹芽菜の義、商人を、アキウドども、アキンドども云  
 と本語にて、タカメナなり。オホミワなり、後世、此大  
 もツカンマツルども云。此の外にも、某人仕奉をツカウマツルと  
 ンブリども云。本語は、カマナ本語を、カウブリども、カ  
 本語は、カマナ本語を、カウブリども、カ

國語 かお遣ひ早學 畢

明治二十三年七月 日印刷  
 明治二十三年七月 日出版

發行者

大阪市南區南炭屋町四十三番屋敷  
 千葉胤矩

著者

大阪府下堺市大町東三丁  
 小田清雄

印刷者

大阪市東區本町壹丁目三十番屋敷  
 大阪國文社 石田源太郎

發賣所

大阪市南區南炭屋町四十三番屋敷  
 千葉三英堂

同

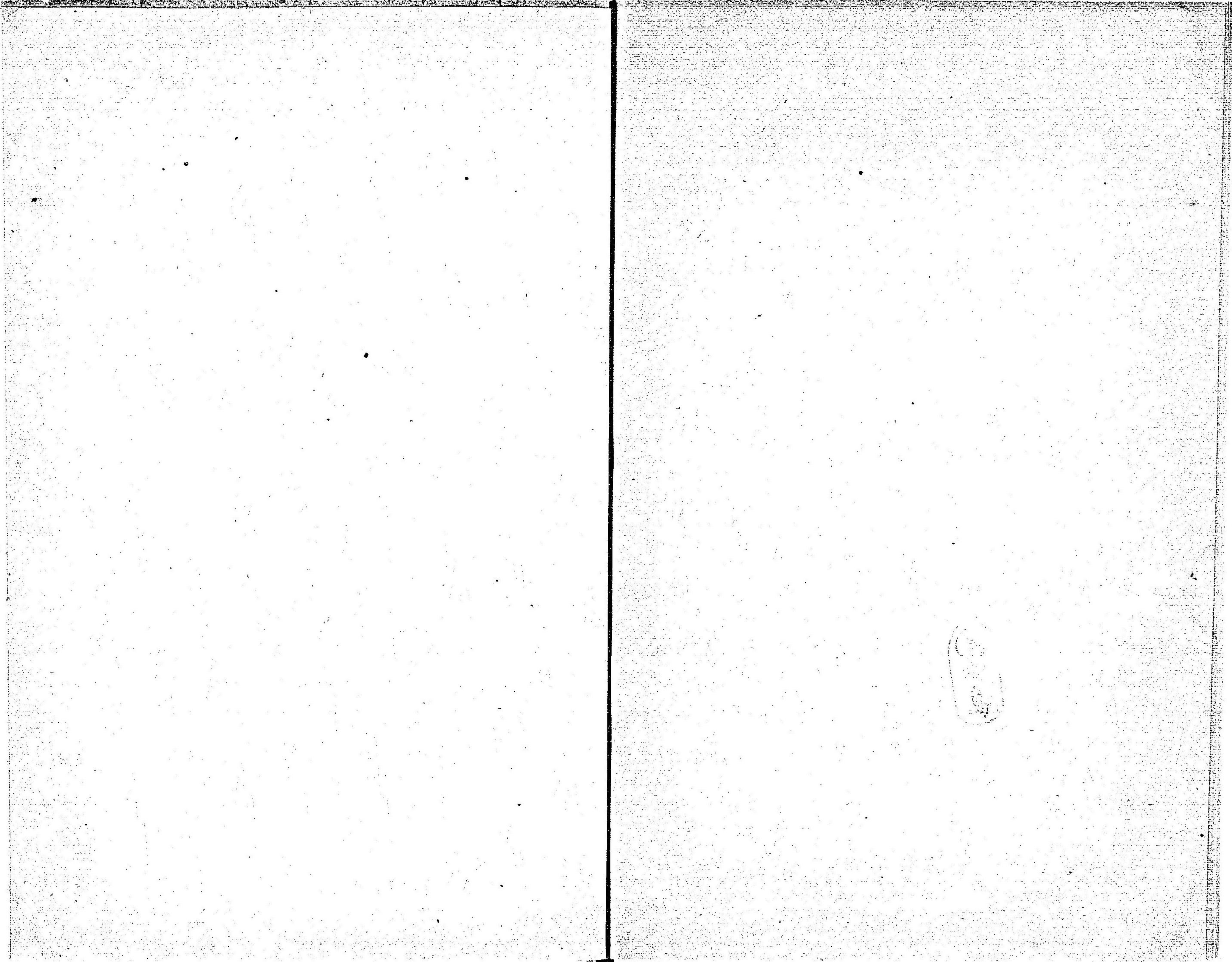
大阪市東區南久太郎町四丁目九十九番屋敷  
 中島抱玉堂

同

大阪市東區北久太郎町四丁目  
 柳原積玉圃

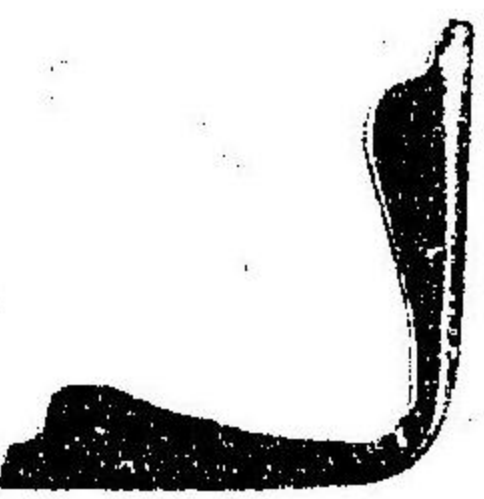
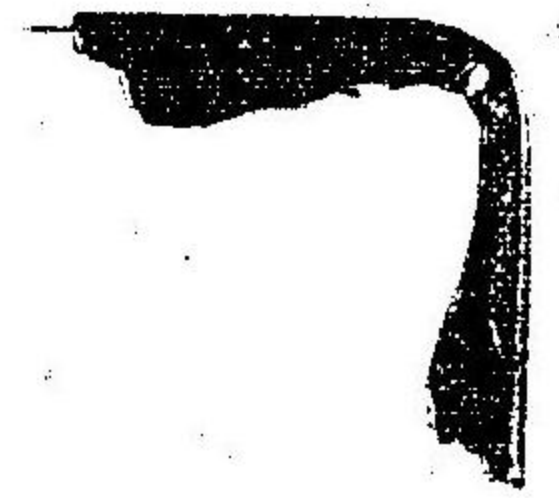
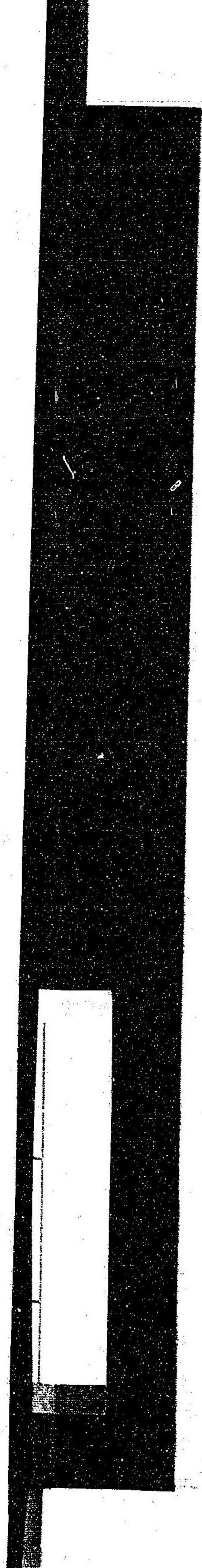






四六拾肆





811.56

0.217k

国語かな遣ひ早学

国立国会図書館

077123-000-0

811.56-0217k

国語かな遣ひ早学

小田 清雄/編

M23.7

DAC-0309

